



多様性の融合で進めるイノベーション

公益財団法人地球環境産業技術研究機構
理事長・研究所長 山地 憲治

2021年6月から理事長を務めることになり、この機会を借りて所見を述べさせていただきます。

RITE は設立以来30年余、CCS(二酸化炭素回収・貯留)、バイオリファイナリー、温暖化対策のシナリオ分析など、地球温暖化問題の解決に向けて様々に取り組んできた。この間に国内外で地球温暖化問題への取組みは大きく進展し、RITE もその一翼を担い貢献してきたと自負している。

最近も地球温暖化対策について大きな動きがあった。昨年10月、パリ協定に基づき我が国は、2050年カーボンニュートラル実現に向けて温室効果ガスを2030年に13年度比で46%削減するという非常に野心的な NDC(国が決定する貢献)を国連に通告した。気候変動枠組み条約の締約国会合である COP26 では、世界的にも多くの国が気温上昇を1.5度までに抑えるというゴールに向けて温暖化対策の目標を引き上げた。更に一層、RITE への期待が高まってきたと思う。RITE の研究をさらに進めて、期待に応える必要がある。カーボンニュートラルを実現する手段として、CCUS(CCS+CO₂ 利用)やバイオ技術に大きな期待がかけられている。実用化に向けて新たな段階に入ったと認識すべきである。

とはいえ、研究は一步一步着実に進めるもので、一足飛びにゴールが実現するというものではない。わが国をはじめ多くの国が掲げたカーボンニュートラルという目標の実現に関わる技術は多様に存在する。電化と電気の脱炭素化、水素や CCUS などのエネルギー関連の対策に加えて、農林水産業における対策も重要である。温室効果ガス削減が難しい分野に関しては、大気から CO₂ を回収して排出を相殺する対策も必要になる。また、技術的な対策に加えて社会イノベーションも重要な役割を果たす。

しかし、世界の動向には注意が必要である。COP26 で我が国は水素やアンモニアを利用した「火力発電のゼロエミッション化」を表明したことで化石賞を受賞した。その他にもノルウェーは CCS を進めていること、フランスは原子力の新設を表明したことにより化石賞を受賞している。火力のゼロエミッション化も CCS も原子力も地球温暖化対策の重要な手段である。カーボンニュートラルという高い目標の実現には、このように特定技術を排除して選択肢を狭めることは大きな障害になる。

地球温暖化対策には、負担は地域ごとに発生するが利益は世界全体に裨益するという構造がある。このような構造を持つ問題に対して、主要国が離脱するような状況を作るとか、特定技術を排除することは、世界の連携を破壊し、地球温暖化対策の自滅を招く。

地球温暖化問題のように世界全体で長期的に取り組むべき課題への対処で重要なのは、技術や文化の多様性を認めて連携・融合を維持することである。最近ではイノベーション政策でもエコシステムの重要性が指摘されているが、これもベンチャーと事業者、産業界と学界など、異業種を隣接させることで多様性の融合が生じてイノベーションを起こすと考えているからである。

RITE も多様性の融合で地球温暖化対策のイノベーションを進めていく。